

表紙に凡例を表示済み

調査者＝建築物石綿含有建材調査者

調査報告書＝建築物石綿含有建材調査報告

テキスト第3版第2刷に基づく

【問題1】 選択肢①、②、③、④は、石綿の性質、使用についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 石綿は天然に産出する発がん性物質である。
- ② 国内で使用された石綿の大半は国内で産出されたものである。
- ③ わが国における石綿の大半は建築物に使用された。
- ④ 耐火材料としての石綿の利用は多くの尊い生命を守り、財産を保全することに寄与した。

【正 答】 ②

【問題2】 選択肢①、②、③、④は、石綿含有建材が使用された建築物のリスク評価のあり方についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 通常の建築物の利用、内外装や設備改修、大規模改修、建築物の解体などの各ステージで、環境リスクとして評価すべき石綿含有建材の種類は異なる。
- ② 石綿を含む岩塊は、細かく破砕するなどして粉じんとならなければ吸入ばく露のおそれはない。
- ③ 小児が長く滞在する建築物は石綿含有調査の優先順位が高い。
- ④ 天井資材の吹付け石綿は、接触などがなければ自然落下することはない。

【正 答】 ④

【問題3】 選択肢①、②、③、④は、石綿による疾病についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 中皮腫、石綿関連肺がんは石綿関連疾患のうち、悪性疾患である。
- ② 石綿肺は、石綿関連肺がん、中皮腫よりも石綿を吸入してから発症までの期間が長い。
- ③ 初ばく露年が若い場合ほど、生涯で中皮腫になりやすい。
- ④ 中皮腫は石綿関連肺がんよりも少ない石綿ばく露量で発症する。

【正 答】 ②

【問題4】 選択肢①、②、③、④は、石綿による健康リスクについての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 肺がんと中皮腫は、一定の石綿濃度とばく露期間に応じて生涯の健康リスクを推定することができる。
- ② クリソタイル、クロシドライト、アモサイトのばく露による健康リスクはほぼ同じである。
- ③ ばく露濃度が高ければ、中皮腫も肺がんも発症が比例して増加する。
- ④ 日本産業衛生学会は、職業ばく露にともなうリスク評価モデルを発表している。

【正 答】 ②

【問題5】 選択肢①、②、③、④は、建築物における石綿含有建材調査についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 一見して全く石綿が飛散していないように見える建築物であれば、まず安全と考えてよい。
- ② 石綿の飛散は接触した面積の多さが関係する。
- ③ 吹付け石綿のある建築物では、人の活動によって床からの再飛散が発生する。
- ④ 吹付け石綿のある建築物の静穏な状態での室内石綿濃度は大気と同等か、それよりも少し高いと報告されている。

【正 答】 ①

【問題6】 選択肢①、②、③、④は、リスクコミュニケーションについての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 専門家から非専門家への一方的な情報伝達である。
- ② リスクの影響を受ける関係者が推薦する専門家の関与が望ましい。
- ③ リスクに関わるすべての利害関係者が参加するスキームが必要である。
- ④ 当該問題に詳しいNPOの参加を促すのが望ましい。

【正 答】 ①

【問題7】 選択肢①、②、③、④は、建築物石綿含有建材調査者についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 石綿含有建材が使用されている場合、発注者からの要求を反映した報告書の作成が求められる。
- ② 調査者は、調査活動を通じて得た情報の機密保持が求められる。
- ③ 調査者は、劣化への対策技術や工法など技術的な助言ができることが望ましい。
- ④ 建築物の石綿含有建材調査結果は不動産価値評価に影響する。

【正 答】 ①

【問題8】ア、イ、ウ、エは、鉄骨造の耐火性能確保についての記述である。これらの記述の中から適切なものがいくつあるか、選択肢①、②、③、④から正しいものを選びなさい。

ア. ALCや押出成形セメント板などで耐火間仕切壁を施工する場合、はりやデッキ下と取り付け補強金物の間に隙間ができる。この隙間埋めや補強金物の耐火性能確保のため、吹付け石綿の施工が行われた。

イ. 合成被覆耐火構造とは、3種類以上の性質の異なる耐火被覆材を施し、鋼構造を形成するもののことである。

ウ. 床スラブとカーテンウォールとの間の隙間を耐火性能のある不燃材で塞ぐことを「層間ふさぎ」という。

エ. 合成被覆耐火構造は、壁と柱、はりの取り付け部分において耐火被覆の施工ができないことを補うために施工されるものである。

(選択肢)

① 1つ

② 2つ

③ 3つ

④ 4つ

【正 答】 ③

【問題9】 選択肢①、②、③、④は、**建築設備と防火材料**についての記述である。これらのうち**不適切なもの**を選びなさい。

(選択肢)

- ① レストランなどの厨房にグリーストラップがある場合、床スラブに大きな開口を施して設置されるため、防火区画（俗称：水平区画）を担保するため、グリーストラップ下端に耐火被覆が必要となる。
- ② 給排水設備では、石綿は耐火性能が必要な排水管に耐火二層管（石綿二層管）として使われただけでなく、耐久性が求められたパッキンにも使用されていた。
- ③ 石綿は、ボイラー本体の断熱や配管エルボの保温・保冷に使われていた。
- ④ 各種機械室・ボイラー室等は、吸音性・断熱性を担保するために、壁や天井に湿式吹付け石綿が使われた。

【正 答】 ④

【問題10】ア、イ、ウ、エは、**建築基準法の防火規制**についての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切(○)であるか、不適切(×)であるかを示したものである。**組合せとして正しいもの**を選びなさい。

ア. 建築基準法では、建築物の用途、規模、地域に応じて、建築物を耐火建築物とすることなどが義務付けられている。

イ. 防火規制とは、耐火構造、準耐火構造、防火構造、耐火区画などをいう。

ウ. 「延焼のおそれのある部分」とは建築物の外壁部分で、隣棟から延焼を受けたり及ぼしたりするおそれのある範囲を指す。

エ. 「延焼のおそれのある部分」とは、隣地境界線及び道路境界線よりそれぞれ1階にあつては3 m以下、2階以上にあつては5 m以下の距離にある建物の部分をいう。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	×	×	×	○
②	○	○	○	×
③	×	○	×	○
④	○	×	○	×

【正 答】 ④

【問題 1 1】 選択肢①、②、③、④は、ア、イ、ウ、エが石綿含有耐火被覆板の製品名として適切(○)であるか、不適切(×)であるかを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

- ア. プロベストボード
- イ. フェルトン
- ウ. リフライト
- エ. カポスタック

製品名 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	×	○	○	×
②	○	×	○	×
③	○	×	×	○
④	○	○	○	×

【正 答】 ②

【問題 1 2】 選択肢①、②、③、④は、内装制限を受ける一定の規模以上の特殊建築物についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 不燃材料には国土交通省告示に定める仕様を用いる場合と、国土交通大臣の認定を受けた仕様を用いる場合がある。
- ② 不燃材料、準不燃材料、難燃材料の要求時間性能は、それぞれ 20 分間、15 分間、10 分間である。
- ③ 主要構造部を耐火構造とした場合を除き、調理室、浴室、乾燥室、ボイラー室などの壁・天井を準不燃材料とすること。
- ④ 劇場・映画館、病院、百貨店等の居室などの内装制限は、床面からの高さが 1.2m以下の部分は除く。

【正 答】 ②

【問題 1 3】 選択肢①、②、③、④は、**建築物の主要構造部**についての記述である。これらのうち**不適切なもの**を選びなさい。

(選択肢)

- ① 主要構造部の「構造上重要な」とは防火上の観点を意味する。
- ② 建築物の構造上重要でない間仕切壁、間柱、附け柱は主要構造部に含まない。
- ③ 居室と避難施設にあたる廊下などとの区画を構成する間仕切壁などは主要構造部に含む。
- ④ 主要構造部とは構造耐力上主要な部分をいう。

【正 答】 ④

【問題 1 4】 選択肢①、②、③、④は、**石綿含有建材の規制**についての記述である。これらのうち**不適切なもの**を選びなさい。

(選択肢)

- ① 1975 (昭和 50) 年、特定化学物質等障害予防規則 (特化則) の改正で 5 % を超える吹付け石綿作業が原則禁止。
- ② 1995 (平成 7) 年、石綿 1 % を超える吹付け作業が原則禁止 (特化則) と強化され、労働安全衛生法施行令 (安衛令) の改正で青石綿・茶石綿の製造等の禁止が行われた。
- ③ 2004 (平成 16) 年、重量比 1 % を超える石綿製品の製造・販売が禁止。
- ④ 2005 (平成 17) 年には重量比が 0.1 % を超える製品の製造、輸入、使用等が禁止された。

【正 答】 ④

【問題15】ア、イ、ウ、エは、鉄骨造の耐火被覆として使用された石綿含有建材の名称についての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切(○)であるか、不適切(×)であるかの組合せを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

- ア. 吹付け石綿
- イ. 石綿含有吹付けロックウール
- ウ. 石綿含有吹付けパーライト
- エ. ケイ酸カルシウム板第二種

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	○	×	○	×
②	×	○	×	○
③	○	○	×	○
④	○	○	○	○

【正 答】 ③

【問題16】選択肢①、②、③、④は、図面名称と図面の記載内容例についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 特記仕様書は、工事に使用する材料の規格等図面に表現できない事項を文字や表で記載している。
- ② 立面図は、東西南北の外観を記載している。
- ③ 矩計詳細図は、天井の見上げ図を各階毎に書き、仕上げの建材名などを記載している。
- ④ 断面図は、床の高さ、軒高、天井高、軒の出寸法や北側斜線制限などを記載している。

【正 答】 ③

【問題17】ア、イ、ウ、エは、調査に当たる際の建築確認図などの設計図書を建築物所有者から借用する場合の取り扱いについての記述である。これらの記述の中から不適切なものがいくつあるか、選択肢①、②、③、④から正しいものを選びなさい。

ア．使用目的と不要な部分の閲覧・複製をしない旨の説明をする。

イ．説明した目的以外のために閲覧・複製してはいけない。

ウ．返却の際は図面・書類を借用書に基づき返却を確認する。

エ．複製であっても、使用後に返却しなければならない。

(選択肢)

① なし

② 1つ

③ 2つ

④ 3つ

【正 答】 ①

【問題18】 選択肢①、②、③、④は、現地調査の調査目的別の主な調査の内容についての記述である。これらのうち適切なものを選びなさい。

(選択肢)

① 調査種別が改修の事前調査のときの「成果物」は、石綿含有建材の有無の調査結果及び維持管理のアドバイスである。

② 調査種別が建築物調査のときの「目的」は、労働者保護や周囲への飛散防止である。

③ 調査種別が建築物調査のときの「調査対象とする建材のレベル分類」は、レベル1、レベル2である。

④ 調査種別が改修の事前調査のときの「高所・有毒ガスなどの危険区域」は、原則として調査しない。

【正 答】 ③

【問題19】ア、イ、ウ、エは、**現地調査の留意点**についての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切(○)であるか不適切(×)であるかを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

ア. 調査者は、事前に得られた情報を整理し、調査に必要な人数や前段取り・機材など調査全体にわたる計画を検討しておくことが重要である。

イ. 調査を円滑に進めるための用品は多種にわたる。現地の状況によって過不足が生じることもあるので、対象の建築物に応じて各自が考え、準備することが望ましい。

ウ. 採取する対象物には石綿を含有している可能性もあることから、試料採取に際しての呼吸用保護具は国家検定合格品のDS-1またはDL-1の取り替え式防じんマスク以上の性能を有するものを使用する。

エ. 調査時の服装のポイントは、調査作業中であることを第三者に伝えるという点と、粉じんばく露からの自己防衛という2点である。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	×	○	×	○
②	×	×	○	○
③	○	○	×	×
④	○	○	×	○

【正 答】 ④

【問題20】ア、イ、ウ、エは、**現地調査の留意点**についての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切(○)であるか不適切(×)であるかを示したものである。**組合せとして正しいもの**を選びなさい。

ア. 現地調査には迅速性が求められるため、同一パターンの部屋が続く場合には、調査対象の部屋であつても割愛したほうが良い。

イ. 調査の正確性は最も重要な要素である。機械室など装置類の障害物がある場合でも必ず四面の壁面、床、天井を確認する必要がある。

ウ. 該当部屋で試料採取する場合、立合人などが粉じんばく露の防護具を装着していない状況下では、作業時に退室を願うなど第三者ばく露防止の安全策を講じる。

エ. 採取時は対象物が散乱しないように素材を丁寧に扱う必要がある。また事前にシート養生を行い、ウェットティッシュや真空掃除機で清掃することなどは必須事項である。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	×	○	○	○
②	○	×	×	×
③	×	○	○	×
④	×	×	○	○

【正 答】 ①

【問題21】ア、イ、ウ、エは、調査に際して実施するヒアリングについての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切(○)であるか不適切(×)であるかを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

ア. 関係者とは、依頼者である建築物の所有者のほか、建築物の維持管理者、地方公共団体の担当者、不動産関係者等であり、利害関係が発生する調査対象の建築物に長く滞在する人や利用する人は含まれない。

イ. 調査者は聞きたい事柄、調べておきたい事象について、依頼者である建築物の所有者の了解を得た上で、これらの情報を有する人に積極的に聞くように努めたい。

ウ. ヒアリングの方法としては、調査日前に関係者から電話で聞く、調査当日に立会者から話を聞く、調査日以降に関係者から電話で聞くなどが考えられる。

エ. ヒアリングの際には、調査対象の建築物のことは調査者よりヒアリング相手のほうが詳しいので、相手の話を十分に聞いて否定しないようにする。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	×	○	○	×
②	○	×	○	○
③	○	×	×	○
④	×	○	○	○

【正 答】 ④

【問題 2 2】 選択肢①、②、③、④は、吹付け石綿の劣化度判定についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 吹き放し工法であるが、状態が良いので「劣化なし」とした。
- ② 人為的な傷やへこみが局所的には少数あるが、全体としては表面劣化が見られないので「劣化なし」とした。
- ③ 全体の状態は良いが、漏水による局所的な劣化が見られるので「やや劣化」とした。
- ④ 一部に自然脱落が見られたため「劣化」とした。

【正 答】 ①

【問題 2 3】 選択肢①、②、③、④は、現地調査の記録方法についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 写真の構図は対象部位を強調するために縦・横の角度を対象部位に合わせて撮影しておくこと、報告書を作成しやすい。
- ② 現地調査では予期せぬことが起こり、予定や事前の計画と異なる状況になることがある。それでも調査を正確に行うために、調査対象部屋内でメモや写真などによる記録を残しておくことは、後の調査報告書の作成にも有効である。
- ③ 対象部屋へ入る前に、部屋名が記載されている場合、これを撮影しておくようにする。
- ④ 写真の構図は2面（天井＋壁）または3面（天井＋壁＋壁＝部屋の隅）を意識すると現地の部屋の奥行きや状況、雰囲気などを伝えることができる。

【正 答】 ①

【問題 2 4】 選択肢①、②、③、④は、調査者の労働安全衛生上の留意点についての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 調査者と調査者を雇用する事業者は、労働安全衛生法及び石綿障害予防規則などの関係法令を遵守しなければならない。
- ② 試料採取者だけでなく補助員と立会者も呼吸用保護具を使用する。
- ③ 調査者は1年以内ごとに1回、健康診断を受けること。また調査者を雇用する事業主は、その結果を当該業務に従事しないことになった日から40年間保存すること。
- ④ 試料採取時は屋内を閉め切り、換気扇などは停止する。

【正 答】 ③

【問題 2 5】ア、イ、ウは、**試料採取**についての記述である。これらの記述の中から**適切なものがいくつあるか**、選択肢①、②、③、④から**正しいもの**を選びなさい。

ア．試料採取箇所の選定は、総体的に偏在しておらず、かつ調査対象の代表といえるような部位を選ぶことが望ましい。

イ．石綿含有吹付けロックウールのように現場で混合された建材は、石綿が均一に分散されていないものも多い。また、石綿が含有のものと不含有の材料が混在して施工されていた時期もあるので、施工時期などに留意して試料採取箇所の選定や試料数の設定をする必要がある。

ウ．調査者は採取対象物の採取位置や付着力の状況にも注意が必要である。例えば、吹付けロックウールによる耐火被覆の「はり」からの採取は、フランジ端部からの切り取りが良い。

(選択肢)

- ① なし
- ② 1つ
- ③ 2つ
- ④ 3つ

【正 答】 ③

【問題 2 6】 選択肢①、②、③、④は、**建築物外観の観察**についての記述である。これらのうち**不適切なもの**を選びなさい。

(選択肢)

- ① 対象建築物の外周を一周し、搭屋や煙突の位置などを確認した。
- ② 立会者との待ち合わせ時間より前に現地に到着し、事前に現場の確認や建築物の全体の写真の撮影などを行った。
- ③ 建築物の規模によらず、注意していなければ見過ごしてしまうような位置に、「定礎」と印刻されたプレートがある場合がある。この定礎に印刻された年月は、基礎工事開始、つまり工事開始の年月を意味しており、建材の年代確認の重要な要素の一つである。
- ④ 建築物の外周を歩いている時には、建築物の位置関係や方位の認識は重要であり、特に石綿の調査においては北面の妻側の壁にのみ、結露防止や断熱を目的として石綿含有建材が使用された、といったケースがある。

【正 答】 ③

【問題27】ア、イ、ウ、エは、**建材製品中の石綿分析**についての記述である。選択肢①、②、③、④は、これらの記述が適切(○)であるか不適切(×)であるかを示したものである。**組合せとして正しいもの**を選びなさい。

ア. 2016(平成28)年3月に制定された建材製品中の石綿含有率測定方法は、偏光顕微鏡及び電子顕微鏡による定量方法 JIS A 1481-4 が追加され4部構成となった。

イ. JIS A 1481(2016)石綿分析方法は、2つの定性分析方法と2つの定量分析方法を規定している。

ウ. JIS A 1481-1 及び JIS A 1481-4 は、建材製品のみに適応可能な分析法について規定している。

エ. JIS A 1481-3 は、X線回折装置または偏光顕微鏡を使用して定量分析を行う。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	○	○	×	×
②	×	×	○	○
③	○	×	○	×
④	×	○	×	○

【正 答】 ①

【問題 28】 選択肢①、②、③、④は、JIS A 1481 に記載されている分析試料採取についての記述である。これらのうち**不適切なもの**を選びなさい。

(選択肢)

- ① JIS A 1481-1 と JIS A 1481-4 による分析では、吹付け石綿などは最小体積 10 cm^3 、工場出荷された建材製品は最小体積 1 cm^3 を試料採取量とする。
- ② JIS A 1481-2 と JIS A 1481-3 による分析では、吹付け石綿などや保温材のような柔らかい材料は1箇所 10 cm^3 程度で3箇所から、板状の比較的硬い材料については1箇所 100 cm^3 程度で1箇所から採取する。
- ③ JIS A 1481-2 と JIS A 1481-3 による分析では、施工面積 $3,000 \text{ m}^2$ 以上は 600 m^2 ごとに施工部位3箇所以上、1箇所当たり 10 cm^3 程度の試料をそれぞれ採取し、等量混合する。
- ④ JIS A 1481-1 では1材料につき1箇所の採取で混合しない。

【正 答】 ②

【問題29】ア、イ、ウ、エは、JIS A 1481-2(2016)の定性分析についての記述である。選択肢①、②、③、④は、これらの記述が適切(○)であるか不適切(×)であるかを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

ア. X線回折法でアスベストの回折ピークなし、位相差・分散顕微鏡法では3,000粒子中クリソタイルの繊維状粒子が1本、アモサイトの繊維状粒子が2本確認されたのでアスベスト含有ありと判定した。

イ. X線回折法でアスベストの回折ピークなし、位相差・分散顕微鏡法でクリソタイルの繊維状粒子が5本確認されたのでアスベスト含有ありと判定した。

ウ. X線回折法でクリソタイルの回折ピークあり、位相差・分散顕微鏡法でクリソタイルの繊維状粒子が3本確認されたのでアスベスト含有ありと判定した。

エ. X線回折法でクリソタイルの回折ピークあり、位相差・分散顕微鏡法でクリソタイルの繊維状粒子は確認されなかったがアスベスト含有ありと判定した。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	○	×	×	○
②	×	○	○	○
③	○	×	○	×
④	×	○	×	×

【正 答】 ④

【問題30】 選択肢①、②、③、④は、**建材製品中のアスベスト分析事例**についての記述である。これらのうち**不適切なもの**を選びなさい。

(選択肢)

- ① 2005（平成17）年に基発188号（1996（平成8）年3月29日：現在は廃止）に基づいて分析を実施した際にはクリソタイル、クロシドライト、アモサイトを対象に分析を行い、アスベストは不検出であった。後に JIS A 1481-2 で再調査したところ、同じ箇所の建材からトレモライトが検出された。再調査の結果をもとにアスベスト含有と判断した。
- ② サイディングを JIS A 1481-1 で分析したところ、前処理しない試料では偏光顕微鏡による探索でアスベスト繊維が見つからなかった。試料を前処理（灰化及び酸処理）したところ、クリソタイル繊維が確認されたので、アスベスト含有ありと判定した。
- ③ バーミキュライトを含む湿式吹付け材を分析機関A社が JIS A 1481-1 で、B社が JIS A 1481-2 で分析を行った。A社はリヒテライト・ウィンチャイトアスベストを検出したが、B社はアスベスト不検出であった。JIS A 1481-1 で検出されたリヒテライト・ウィンチャイトは実体顕微鏡で数mm程度の紡錘形の束で入っており、アスベスト含有ありと判断した。
- ④ ひる石試料を吹付けバーミキュライトの定性分析法（JIS A 1481-2）で分析したところ、クリソタイル含有と判定された。分散染色法で顕微鏡観察を実施したところ、クリソタイルが確認されず、偏光顕微鏡及び電子顕微鏡で確認したところ、いずれの方法でもアスベストを含む繊維状粒子は確認されなかった。吹付けバーミキュライトの定性分析法（JIS A 1481-2）結果を優先してアスベスト含有ありと判定した。

【正 答】 ④

【問題 3 1】 選択肢①、②、③、④は、アスベスト分析法についての記述である。これらのうち適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 偏光顕微鏡分析では建材試料を肉眼及び実体顕微鏡で予備観察し、試料を粉砕して観察用スライドを作成し、繊維の形状及び複数の光学的特性（色・多色性、複屈折の大きさ、消光角、伸長の符号、分散色）を組み合わせるアスベストの同定を行う。
- ② 位相差・分散顕微鏡分析では試料を粉砕して観察用スライドを作成し、繊維の形状及び光学的特性（分散色）によりアスベストの同定を行う。
- ③ 電子顕微鏡分析では高倍率で形態観察ができるので、繊維の形態のみでアスベストの同定を行うことができる。
- ④ 肉眼及び実体顕微鏡による予備観察を実施してアスベスト繊維が確認された場合は、偏光顕微鏡分析を実施する必要はない。

【正 答】 ②

【問題32】ア、イ、ウ、エは、建築物石綿含有建材調査報告書の作成についての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切（○）であるか、不適切（×）であるかの組み合わせを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

ア. 建築物石綿含有建材調査報告書は、現地調査総括票、表紙、調査結果概要及び現地調査個票・写真集の4構成で作成する。

イ. 現地調査総括票は基本的に、調査した建築物の吹付け石綿（レベル1）及び保温材・断熱材・耐火被覆材（レベル2）の石綿建材の有無を、建築物の所有者に報告する。

ウ. 自治体では調査結果概要を基に建築物データベースに保存することとなる。

エ. 現地調査総括票及び現地調査個票の記入項目について、記載すべき事項が不明の場合や該当する項目がない場合は空欄とし、見やすい票になるよう留意する。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	○	×	○	×
②	○	×	×	○
③	×	○	○	×
④	×	○	×	×

【正 答】 ④

【問題33】ア、イ、ウは現地調査総括票の今回調査箇所の記載についての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切（○）であるか、不適切（×）であるかの組み合わせを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

ア．調査結果は、調査対象建材のあった部屋だけではなく、調査した全部屋について記載する。

イ．目視で石綿含有可能性材を発見したが、すでに採取した箇所と同じ石綿含有品のため検体を採取しなかった場合は、「採取」の項目に○をする。

ウ．調査者は、分析機関から送られてきた分析結果内容を確認し、問題が無ければ「石綿分析結果報告書」に基づいて忠実に、石綿の種別（または石綿不検出の表記）、含有量をそのまま転記する。

記述 選択肢	ア	イ	ウ
①	×	○	○
②	×	×	×
③	○	×	○
④	×	○	×

【正 答】 ③

【問題34】ア、イ、ウは現地調査総括票の記入についての記述である。これらの記述の中から適切なものがいくつあるか、選択肢①、②、③、④から正しいものを選びなさい。

ア. 立入調査が十分できなかった箇所については、調査者の見落としと区別する意味においても、階・部屋名などを記載するとともに、図面で図示し、その理由も簡潔に記載する。

イ. 劣化度の判定は調査者の知識や経験によって異なることがあるので、必須の記入項目としない。

ウ. 調査者氏名欄には、当該調査を主体的に行った者の氏名及び登録番号を記載し、補助した者の名前の併記は不要とする。

(選択肢)

- ① なし
- ② 1つ
- ③ 2つ
- ④ 3つ

【正 答】 ③

【問題35】選択肢①、②、③、④は現地調査総括票及び現地調査個票の下書きについての記述である。これらのうち不適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 調査者の目視推定と分析機関の分析結果報告が異なる結果となった場合には、分析結果報告書を採用する。
- ② 調査者は分析方法について学ぶと共に、添付された分析写真やチャートの見方などについても、経験を積む努力は重要である。
- ③ 調査者は分析結果の報告まで含めて調査全般を差配しているし、内容についての十分な説明は依頼者に対しての責務である。
- ④ 現地調査個票は調査した部屋の順番に作成することが望ましい。順位を変えるとストーリー性がなくなり、間違いの元になる。

【正 答】 ①

【問題36】ア、イ、ウ、エは、現地調査総括票の調査者からの今後の維持・管理のためのアドバイスについての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切（○）であるか、不適切（×）であるかの組み合わせを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

ア．石綿含有建材を使用している部屋は、使用頻度が多ければ石綿によるリスクは高く、年数回しか使用されないような部屋のリスクは低い。

イ．調査は、石綿含有建材の有無と、有りの場合の劣化度を主として確認したものであるが、それによって部屋毎の石綿によるリスクも判定できる。

ウ．建築物の管理は、建築物所有者の責任範囲であるので、劣化度の判断を主とした総合判断を調査者が行う必要はない。

エ．未成年者や不特定多数の人が利用する部屋は、石綿によるリスクはそれほど高くないので、劣化度が「やや劣化」の場合、維持・管理のためのアドバイスは定期的な目視点検を推奨すればよい。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	○	○	×	○
②	×	×	○	○
③	○	×	×	×
④	×	○	×	○

【正 答】 ③

【問題37】ア、イ、ウ、エは、レベル3の石綿含有建材調査についての記述である。選択肢①、②、③、④はこれらの記述が適切(○)であるか、不適切(×)であるかを示したものである。組合せとして正しいものを選びなさい。

ア. 建材の石綿含有情報とは、石綿を意図的または非意図的に原料として混入していたという情報である。

イ. 国土交通省と経済産業省が共同で情報開示しているデータベースを引用する際は、判断根拠を明らかにするために、必ず引用元を明示する。

ウ. 特記仕様書には、天井裏などの見えない箇所の使用材料が記載されており、屋上のルーフィングやコーキングの施工箇所の確認ができる。

エ. 実際に使用されている建材の石綿含有判定ができるのは、図面に記載されている製品名の建材が使用されており、施工年月から製造年月を推測でき、メーカーが正確な情報を開示している場合に限られる。

記述 選択肢	ア	イ	ウ	エ
①	○	×	×	○
②	×	○	×	○
③	×	○	○	○
④	○	×	○	×

【正 答】 ②

【問題38】ア、イ、ウ、エ、オは、石綿含有建材についての記述である。これらの記述の中から適切なものがいくつあるか、選択肢①、②、③、④から正しいものを選びなさい。

ア．屋根ふき下地材として施工される石綿含有ルーフィングはレベル3含有建材であり、石綿含有率が高く目視でも石綿含有の有無が識別できる。

イ．配管保温材はレベル2だが、配管のパッキンはレベル3である。

ウ．石綿含有壁紙は、壁面の隅などに「不燃第0005号無機質壁紙」と記された3cm四方のラベルが表示してある場合がある。

エ．耐火二層管は繊維モルタル成形の外管に硬質塩化ビニルを内在させた製品である。

オ．煙突用石綿断熱材はレベル2だが、石綿セメント円筒はレベル3である。

(選択肢)

- ① 1つ
- ② 2つ
- ③ 3つ
- ④ 4つ

【正 答】 ④

【問題 39】 選択肢①、②、③、④は、レベル3の石綿含有建材についての記述である。これらのうち適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① 建築物の施工時期がわかれば、レベル3の石綿含有建材はかなりの確率で推定することができ、竣工時の図面によって石綿含有の有無が把握できる。
- ② ケイ酸カルシウム板第二種は、内装仕上材や軒天に使用されるレベル3の石綿含有建材である。
- ③ 1995年に輸入された石綿の半分以上はスレートに使用された。
- ④ レベル3の石綿含有建材は品数が多く、レベル1、2と比較して約10倍である。

【正 答】 ③

【問題 40】 選択肢①、②、③、④は、レベル3の石綿含有建材調査における試料採取での留意点についての記述である。これらのうち適切なものを選びなさい。

(選択肢)

- ① レベル3の石綿含有建材は、改修工事の対象になりうるため、代表的な試料を採取するには細心の注意を払う必要がある。
- ② 天井材の採取を行う場合は、天井点検口のふた部分から採取することによって損傷を最少にできる。
- ③ 床用ビニルタイルは接着剤が付着していることがあるが、接着剤は石綿含有ではないので、採取する必要はない。
- ④ JIS A 1481-1による分析を行う場合は採取する試料の量は最低3cm³必要である。

【正 答】 ①